慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	西洋史の先学たち(一)
Sub Title	Pioneers in the study of European history at Keio University (1)
Author	神山, 四郎(Koyama, Shiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.2/3 (1991. 6) ,p.41(215)- 45(219)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	報告 第一回座談会 三田史学の百年を語る
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西洋史の先学たち（一）

神山四郎

司会（坂口）　次のお話しを始めさせていただきたいと思います。

先ほどお話に出ましたように、慶應の歴史学というのは、日本史・東洋史・西洋史の分かれがないのだ、すべてを統合しているのだ、総合的な関心を持たなければならないと常々言われて参りました。もちろんそのことは当然でございますけれども、この総合の中で三田の西洋史をどのように位置づけるか、そんなことを考えながら、先生方の話を伺いたいと思います。

初めに神山先生、お願いします。

神山　これからは西洋史の話だそうですが、先ほどお話をし足りなかったことを付け足して、それから西洋史のことは森岡さんにバトンタッチしたいと思います。

先ほどは、慶應には福沢諭吉のギゾー風、バックル風の歴史観と、田中萃一郎のリース・ランケ風、それからランプレヒト風の歴史観という、かなり質の違った歴史観が流れ込んでいて、それをどのようにこなし、慶應の史学にしていったかというようなことを話したのですが、福沢と田中の関係ということは大変大事だと思うのですけれども、実はいま私どもにはそれを知り得る確かなものが何もないのです。田中先生がリースには確かに在学中習って、一番よくリースの講義を理解した人だと言われているのですが、慶應を出ましてから、さっき河北さんが言われたように伊豆の方へ行ってしまって、伊豆の地方史のようなものをちょっと書いているくらいであまりパッとしない。そのうちに慶應へ呼ばれて、それから一挙に学者として仕上がるのですが、学生時代を通してその間、どのような福沢との関係があったのか皆目分か

らないのでございます。今ではそれを伺える先輩はなく、お宅にはまだたくさん未刊行資料があるのですが、その中に日記類のようなものがもしあれば多少とも分かると思うのですが、いまのところは全く分かりません。

ただ、福沢は、歴史家ではないのですけれども、非常に鋭い歴史感覚をもち厳しい歴史批判をしております。福沢先生自身は歴史が本職ではないのですから、たとえば頼山陽とか新井白石とか、わりとポピュラーなものをちょっと読んだ程度で、それほど歴史研究に深く入ったわけではないのですが、歴史の問題を非常に鋭くつかみ出して歴史家にぶつけております。日本の歴史が政変、政治権力の取りっこを書くだけで、ネーションの歴史がない、つまり国民の歴史が何も書かれていないではないかとか、新井白石が天下の政変が九回変わったと言うけれども、何のことはない一つの芝居を九回上演したようなものだ、同じようなことを繰り返しているだけで、権力の体系自体はちっとも変わっていないのだと、なかなか辛辣に批評しております。そこでギゾーの歴史観を取りまして、だから権力が偏重してはいけないのだ、こういうのをつぶして、分散した権力の中で本当に自由な社会の進歩が得られるのだという意見になるのです。

結局、それは何か歴史学の方法を示唆したり、歴史家にある研究の仕方を教えたりというようなことはしないで、非常に奔放な、また鋭い歴史批判をやっただけなのですが、それが日本の歴史家にとっては大きなインパクトになっていると思います。とにかく英仏流の歴史学を一番先に、明治初年に、福沢だけではなく田口卯吉などもそうですが、取り込んでいるわけです。これは西洋の歴史学で言えば文化史、あるいは今日流行の社会史というものにさえ通ずる内容のものですが、慶應が先んじて、それを歴史家でもない福沢先生が取り込んだということは大きなことだと思うのです。ところが、日本にはその後にリースが入ってきて、リースは東京帝大に入って、日本の歴史学界をがっちり官学で固めてしまったので、日本の歴史学は大体リース流に、つまりドイツ流の政治史・国家史に流れてしまったわけで、福沢流の、つまり慶應流の英仏流の文化史・社会史的な民間史学は途切れてしまったわけです。その後日本のナショナル・ヒストリーがだんだんウルトラ・ナショナリズムになって行って、遂に太平洋戦争になって、敗戦になって初めてナショナル・ヒストリーが潰れて英米流の方法にみちが開かれて、いまやっと文化史、あるいは文明史、あるいは

社会史というようなものが通用するようになってきたわけです。だからいまの方法は実は一番初めに福沢が切り開いたものですが、それが一時切られてしまったというのが、日本の史学史の本当のところだと思うのです。

しかしその慶應の中でも、昔は福沢先生の考えは歴史家の中であまり取り上げられなかったようです。私どもが塾生だったころの塾長の小泉信三先生が福沢諭吉を大変研究しまして、福沢の歴史観が社会科学的な方法をすでに持っているので、これはある意味ではマルクス的な方法にも通ずるものだと言われました。実際、福沢の著作、ことに『文明論之概略』は明治時代にはそれほど読まれていなくて、後代になってもまだそれほど読まれていなかったのですが、『民情一新』や『旧藩情』も含めて、これは非常にレベルの高い社会科学的な方法を持っているということを小泉塾長が言い出したあたりから急に読まれるようになりました。そのもうちょっと前に永田広志が「日本唯物論史」の中で大変高く評価しているのですが、これは唯物論者が唯物論的な技術史として歴史を見るので、福沢の『民情一新』を自分たちと同じような方法だということで高く買っているだけなのです。そういうわけですから、経済学部の方では恐らくかなり影響があったと思うのですが、史学科の方にはあまり出てこないのであります。

それから、田中先生はあれほどリースをよく理解し、リースから学んだのですが、多くの弟子が皆リースに従ってナショナル・ヒストリーの方向へ行ってしまったのに、先生はちょっと違うようです。たとえば東大では坪井九馬三がそのいい例ですが、政治史・国家史の傾向に沿って日本の国定教科書を基本的に決めるという方向で、日本中がみんなドイツ史学、ランケ史学オンリーになってしまったのですけれども、田中先生はどうしてかナショナル・ヒストリーの方へは行かなかった。どうも先生はドイツ嫌いであったようです。

史学概論にしても、ベルンハイムという人の『史学概論』がほとんど日本の大学の共通教科書みたいに使われていたのですが、田中先生はベルンハイムをそう買わないですね。あまりドイツ風ではないのです。ということは、知らないうちに福沢史学、あるいは福沢の歴史観の影響を受けていたのではないでしょうか。どの程度福沢のものを読んでいたか分からないのですが、あるいは慶應の学風にそういうものがあったのかもしれません。とにかく福沢と田中の二人の関係は、直接にどういうこと

があったかよく分からないのですが、分からないながらに、田中があれほどリースに学びながらドイツ史の方へ行かず、ナショナル・ヒストリーに行かないで、むしろイギリス風のリベラルな政治思想、あるいは文明論の方に傾いて、その方向に慶應の歴史学の道をつくって行ったところが、どうも福沢と田中の関係ということではないかと思うのです。『文明論之概略』を読んだとかいうことが分かるとはっきりするのですが、いまのところは皆目わかりません。福沢と田中の関係はそういうことだろうというふうに推測でしか申し上げられないので、お恥ずかしい次第ですが……。

なお、ちょっと付け足しておきたいと思うのですが、田中先生が主宰して文学部に史学科ができ、三田史学会もできたのですが、大正十二年にはもう大きな仕事をしております。これは大正十二年から始まって昭和元年まで読いたのですが、『泰西名著歴史叢書』全十四巻という、西洋の歴史の名著の翻訳叢書を刊行しているのです。これは大変な仕事で、その当時のヨーロッパの最高水準の歴史書、しかも大著を慶應がみんな訳してしまったのです。いま急いで申し上げますと、第一巻がクーランジュの『希臘羅馬史論』、これは有名な『古代都市』の訳ですが、鈴木錠之助（鈴木泰平先生の御父君）が訳しています。第二巻が『ヨーロッパ文明史』、先ほどお話したギゾーの文明史で、これは松本芳夫訳です。第三巻がブライスの『神聖羅馬帝国』、これは占部百太郎訳です。第四巻が『ルネサンスの文化』、ブルクハルトの名著で、一世を風靡したルネサンス論であります。いまはホイジンガのものも出ておりますが、当時の最高のルネサンス史です。これは間崎万里訳です。それからランケの傑作『欧州近世史』、これは阿部秀助訳です。それからジョン・リチャード・グリーンの『大英国民史』、上中下巻の大部なものですが、戸川秋骨の訳です。第九巻がテーヌの『大革命前の仏国』、松本信広訳です。それからチーグラーの『独逸思想史』、これも大きなものですが、伊藤吉之助・飯田忠純共訳。その次が『米国近世史』、ハウオースという人の近世史で、これは木村重治が訳しております。その後がドイツのヘルダーの『歴史哲学』です。後期の大著〈イデーン〉の邦訳です。これは今日でもまだ完訳がないのですが、もうすでにこのときに〈イデーン〉の全訳が出ているのですから驚きます。これは田中萃一郎が訳している。橋本孝先生が若い助手時代に下訳をやっているようですが、これが上下巻です。

合計これで十四巻になり、大部なものでございます。並べると私が両手を広げるぐらいの叢書になっております。この当時のヨーロッパの最高水準のものをみんな慶應が訳してしまったので、東大でもこの後こういうことをやろうと思ったがもう訳す本がなくなっていたということをあとで聞きました。それほどの仕事を慶應はしたのでございます。どうか若い諸君、これを継いで第二弾の歴史名著叢書を出していただきたいと思います。皆さんにそれをお願いしたいと思って、私はこの叢書全巻を定年退職したときに研究室へ寄付して残してきましたから、どうかごらんになって下さい。この第二弾をぜひ出していただきたいという願いをこめております。

そんなことで、田中萃一郎から始まった慶應の西洋史学が、その後占部百太郎先生の立派なイギリス議会史、憲政史を生みました。占部先生は私どもが塾生だったときにはもう仕事を終わられて、漢詩なぞをつくっては私達に見せて下さいました。占部先生から間崎先生のイギリス自治領史などにこの系統がつながります。ここらから先きは森岡先生に伺いたいと思いますので、私はこれで失礼します。

司会　どうもありがとうございました。

福沢と田中の関係をさらに詰めてくださいまして、西洋史の説明に入る輪郭を話していただきました。

森岡先生に西洋史の銘々伝と言ったらいいでしょうか、それをお願いいたしたいと思います。